

秋田市における商業構造の変容

工藤宏子

Transformation of the commercial structure in Akita City

KUDOU hiroko

Abstract : After legal restrictions had been eased by the Large-Scale Retail Store Law revision, the big retailer had a big influence on the retail trade in the region. The business district structure has greatly changed.

In this research, it is case as for Akita City. The big retailer's store location development is verified. The relation to the retail trade in the distribution pattern and the district is clarified. The commercial structure in Akita City is considered.

The commercial structure in Akita City is surmisable the change from the population decrease of suburbs and the influence of the redevelopment of the center part in the future.

Keywords: 中心市街地(central city) , 大規模小売店舗(large-scale retail store) , 商業構造(commercial structure) , 空間分布(spacial distribution)

1 . はじめに

1.1 研究目的

都市は人が生活する上で必要な機能が発揮される場所である . 商業・工業・交通・行政・医療・文化などの機能を住民および都市外の住民に提供するのが都市である . 今日、立地の場所や都市の規模にかかわ

らず、都市経済の中で商業機能の占める割合は高い . 特に小売業において、日本では 1960 年代以の高度経済成長とモータリゼーションを背景とし、郊外化が起こった . 地方中小都市では、中心商店街の衰退が顕在化しており、商業構造に変化が生じている .

本研究では、秋田県秋田市を事例として、商業地域構造の変容を明らかにし、変容のプロセスとメカニズムを解明することを目的とする . また、大規模小売業の店舗立地展開を検証し、その分布パターンと地区

工藤 : 〒305-0006 茨城県つくば市天王台 1-1-1 総合研究棟 A
E-mail:s0820932@tsukuba.ac.jp

の小売業との関係から、秋田市の商業構造について考察する。

1.2 研究対象地域

秋田市の商業集積は北前船の寄港地として海運の拠点となった北西部の土崎地区から始まった。その後、佐竹氏の城下の外町の商人町を整備し、通町、大町など中心地区に移動した。昭和30年代後半に公共機関の移転を契機に大型店が集積。戦後、駅前の兵営地が解散した後、引揚者が零細な店舗や飲食店を開き、その後の市街地再開発に伴い駅西地区が商業の中心となった。1970～1990年にかけて人口増加により市街地は南東方向に大きく拡大、市の南西端には県内最大級のショッピングモールを有するニュータウンが建設され、市内外から消費者を集めている。時代背景によって新たな商業の集積が形成されては、盛衰も移り変わってきた。

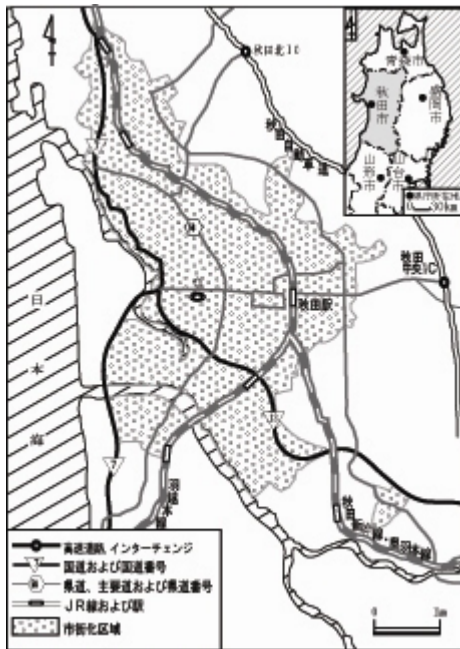


図1：研究対象地域
(5万分の1地形図より作成)

1.3 調査方法

本研究では、大規模小売店の立地と中心商業地区の変遷から、秋田市の小売業の空間構造と双方の関連を明らかにした。

大規模小売店は、店舗の立地をGIS上に年代別にプロットした。資料は、秋田魁年鑑2008を使用した。

中心商業地区については、土地利用と聞き取り、再開発事業の内容から、中心市街地の現状と課題を明らかにした。結果を踏まえ、最後に秋田市における商業構造の変容過程と、商店経営の変化についても検討し、将来像にも言及する。

2．大規模小売店立地からみた小売業の空間構造

1985年ごろまでは、10000㎡を超える大型ショッピングセンターや専門店ビルなどは秋田市にしか立地していなかったが、1998年以降、県内各地に次々と立地した。また、1000㎡以上の大型店は、市内において中央地域が最も多い。中央地区と南部地域は増加傾向で、西部と北部は新規の出店は少なくなっている。

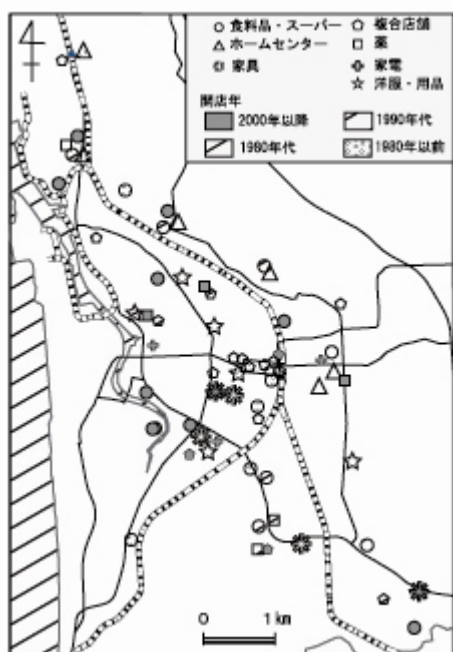


図 2：秋田市中心部における大規模小売店
(1000 m²以上) の分布(2006)
(秋田市商工会議所調べより作成)

平成初期にかけて、それまでの大型店への規制が緩和され、店舗数は一気に増加している。結果、市内では売場面積最大であるイオン秋田ショッピングセンターの立地や増設、秋田サティ、など巨大な駐車場を有するショッピングセンターが多くなり、加えて周辺市町村にも大型ショッピングセンターが建設され、中心部以外にも商業地区が形成され、市内への集客が分散された。結果、1990年代をピークとして大規模小売店は淘汰され、再び減少傾向にあるといえる。中心部、特に駅から離れるほどに郊外の影響を多く受けているといえる。



図 3：大規模小売店の売場面積と業種
(2006)
(大規模小売店舗立地法届出状況 2007 より作成)

3．中心商業地域の変遷

秋田駅西口からのメインストリート・広小路は昭和の終わりに多くの大型店が立地し、買回り品を中心とした県内最大規模の商業集積を有していた。しかし平成に入ると大型店舗の閉店が相次いだ。

1998年には日赤病院が郊外へ移転し、空き地が目立つ。この日赤病院跡地を中心とする約 2.9ha は再開発事業地区として決定されている。

駅前広小路には、駅ビル、専門店ビル、総合スーパー(イトーヨーカドー)などの大型商業施設が立地。固定客は高齢者が多く、通勤・通学者などの新規顧客の開拓に課題を残している。

1980年代に駅前地区は再開発が行われ、個人が居住を兼ねた店舗によって形成されていた金座街が消滅した。跡地はイトーヨーカドーとなり、周辺にも立体駐車上がで

きたことで高層化が進んだ。また、近年ビジネスホテルが2件立地したことで宿泊機能が高まっている。平成4年ごろから、商店街からの出店・廃業が相次ぎ、特に中道は空き店舗や空き地が目立つ。

4. 考察

秋田市の商業は、伝統的な商業地区である中心部で客足が遠のいている。しかし、中央地区のなかでも秋田駅付近は複合商業施設の集合や、活性化事業の一環である活性化拠点ビルの建設により、買い物客が増加する傾向にある。よって、今後は、秋田駅周辺と、距離がある地区で差が開くと考えられる。

さらに、南東部の御所野地区には平成20年度以降も新たな店舗が出店する予定があり、イオン秋田ショッピングセンターを核とした、この商業地区はさらに秋田市における地位を高めることが考えられる。

一方で、広すぎる駐車場は最寄品の買い物には不便と感じる住民もいることから、スーパーなどは影響を受けにくい可能性がある。

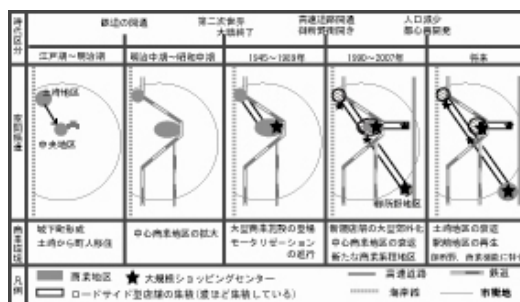


図4：秋田市の小売業立地の変遷モデル
(著者の調査、聞き取りより作成)

5. おわりに

これまでは市街地の拡大に伴い、新規出店店舗も郊外に移る傾向にあった。2000年以降は新規出店が減少し、その立地も郊

外化の傾向が以前よりも顕著に現れない。このことから、秋田市の大規模小売店の立地は郊外化に歯止めがかかっている状況である。

高齢化や人口減少に伴い、日常生活に関する産業が大きく衰退し秋田市のマーケット自体が縮小することが予測される。よって小売店の淘汰はさらに進むものと考えられる。市の商業構造が拡大傾向にないことは図2から明らかで、今後は質的な変化について考察する必要がある。

急速に高齢化の進む秋田市では、雪かきなどをしなくても良い集合住宅や、交通の便のよさから、中心部への人口回帰を計画している。これにより、再び市街地に注目が集まりつつあり、今後も商業の中心は時代背景により移りゆくものといえる。

参考文献

- 香川勝俊(1987):小都市における大型店立地の地域商業への影響 小売商業機能と中心商店街への影響を中心に - ,人文地理,3,217 - 233 .
- 生伊沢進(1990):大規模店舗の進出と商店街,地理,35 - 9,42 - 49
- 横尾実(1991):城下町秋田の地域形成様式,東北地理,43 19-29 .
- 森川洋(1993):都市システムとの関連から見た大型小売店の立地展開 経済地理学年報,39,116 - 135 .
- 川瀬正樹・村山祐司・藤永 豪・渡辺康代・岩間信之・兼子 純・鄭 美愛・田中耕一(1998):常陸太田市における商業地域構造の変容,地域調査報告,20,1 - 42 .
- 小林達也(2004):「秋田市における中心市街地の変遷」

